

エッセイ

あれも見たい!これも撮りたい!~私の昆虫撮影記~
(その6 卵を守る昆虫)

千葉大学大学院 准教授

野村 昌史 (のむら まさし)

小説を読むときや映画を観るときに感動するシーンは、人それぞれだと思うが、愛する人や子供たちのような「大切なものを守る」場面は、多くの人にとって印象に残り感動するシーンの一つと言えるだろう。

昆虫にも、このような他個体を守るという行動が見られる。行動学的には「利他行動」とよばれるもので、昆虫のように感情がない生物には相応しい言葉とも言えるが、どうも味気ないので、ここでは「守る行動」としておく。

社会性をもつハチ類は、巣を襲う外敵に対し、自分の親兄弟（ここでは姉妹）を守るために、様々な行動を起こす。しかしこのときの彼女らの行動は、集団で外敵に襲いかかり、大あごでかじったり毒針で刺したりすることであり、この場面に遭遇したとしたら、多くの方は恐怖を感じることはあっても、お世辞にも感動するシーンとはならないだろう。

昆虫において我々も感動するような「何か」を守る行動は、「異性を守る」か「卵を守る」場面がこれに当てはまりそうである。しかしトノボの産卵時にオスがメスに連結していたり、すぐそばで飛翔していたりするのは、パートナーを大事に思っているというより、「ちゃんと自分の精子を使って受精した卵を産んでいるかどうか、他のオスと交尾してしまわないか、目を光らせている」という猜疑心に近いので、(状況を知っている者には) 献身的な行動という感じはしない。一方で、自分が産んだ卵を守るという行動は、状況としてまさに自分の卵を「必死に守っている」のであり、それを観察・撮影するとき、ある種の感動に似た感情が湧き上がってくる。

しかし卵を守る昆虫はどのくらいいるのだろうか。社

会性が発達しているハチ類やシロアリ等は、女王が産んだ卵をワーカーが預かり、それこそ成虫になるまで大事に育てられるが、社会性をもたない昆虫の多くは、たいてい卵は産みっぱなしであり、卵を守る種類は、それほど多くはない。

卵を守るという形質は、どんな昆虫にも見られるわけではないが、カメムシの仲間に何種か見いだすことができる。なかでも背中の中のハート型の模様が印象的なエサキモンキツノカメムシはその代表といえるかもしれない(図-1)。このメスは自分が産んだ卵を飲まず食わずで守り続け、幼虫がふ化しても守り続ける。そして幼虫が2齢になってようやく育児から解放される。6月ごろにミズキの葉などで見られるこの光景は、何度見ても感動的である。また水生昆虫のコオイムシはメスがオスの背中に産卵し、オスはこの卵がかえるまでケアするいわば昆虫界のイクメンだが、こうした行動も献身的な感じがする。しかしオスとメス両方で卵を守る昆虫はいないようで、卵を守る行動における昆虫界の男女共同参画はまだ先のようなのである。

ハサミムシの仲間もメスが産んだ卵を守っているが、彼女らの育児室は石の下とかなので、あまり目に付かないのが残念である(図-2)。それだけに偶然見つけたときの喜びは大きく、とても嬉しくなってしまう。しかし臆病な彼女らは過度に驚かすと卵を置いて一時退散してしまうので注意が必要である。ハサミムシの卵保護には、さらに献身的な行動をとるものがある。なんとふ化した幼虫に、餌として自分の体を捧げてしまう種があるのである。コブハサミムシの行動がそれで、とても興味深いものの、もはや感動という段階を超えている行為である。まだ見たことのないこの献身的すぎる行動の撮影は、これからの出会いにとっておくことにしよう。



図-1 エサキモンキツノカメムシ



図-2 ハサミムシ